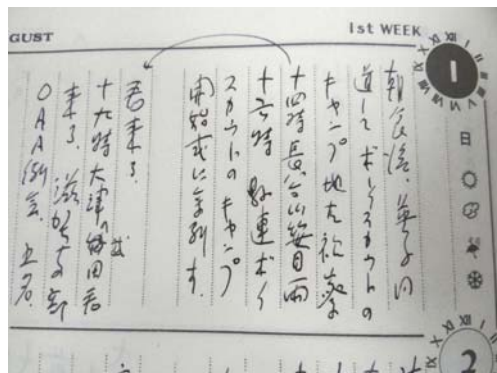


山本一清博士と東亜天文学会（1）

東亜天文学会会員 武田榮夫

はじめに

1953年、中学2年生のときに東亜天文学会に入会。1954年に大津市郊外の田上（たなかみ）天文台（のちに「山本天文台」と改称）を訪ね、山本一清博士と初めて出会う。奇しくも今回の資料整理の中で、同年8月1日の博士の日記に「十九時大津の武田君来る」と記述されていたのを見出し、感慨無量であった。高校時代は、火星や人工衛星観測に関する会合（田上や花山天文台）などで博士に数回お出会いする。その後、しばらく退会するが、気象関係の勤務先に贈呈されてくる会誌「天界」を永年読み続ける。退職後の2000年に再度入会し、現在に至る。若き日に星空に興味を抱き始め、「宇宙への扉」を開く大きな「きっかけ」を与えて下さった山本一清博士のことを心に覚えて、今回の資料調査に加わることになった次第である。

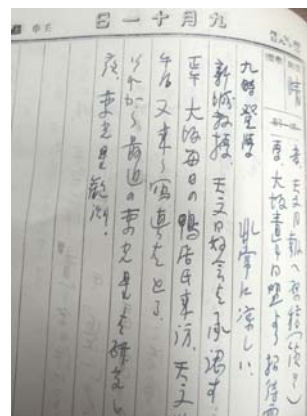


東亜天文学会の歩み

- 1920（大正9）年 古川龍城氏らと「天文同好会」を發足、会誌「天界」を發行
- 1933（昭和8）年 東亜天文協會と改称
- 1943（昭和18）年 東亜天文学会と改称



『天界』創刊号の巻頭をかざる趣意書



新城教授の承認を記した日記

「天文同好会」発足の経緯

1920（大正9）年9月11日の日記に、「新城教授、天文同好会を承認す」と記述されている。この後、会誌「天界」の第1号（1920年11月号）に「天文同好会創立の趣意」と「同好会成立の由来」の記事が以下のとおり掲載されている。

「天文同好会創立の趣意」から一部を引用（現代かなづかいに直す）する。

「ところが実際吾々の知人朋友を見渡しますと少ないながらも天文学に興味を持っている人々が若干在るのです、そういう人々がお互いに今以上の便宜を得て其の天文学の了解を一層深めたならば其の結果は個人々々の利益だけでなしに又、社会への天文学のプロバガンダのための一大勢力を作ることが出来るように思います。此の考えからここに同志を得て同好会を創立しようと思うようになりました。」「此会は多くの熱心家を会中に発見してかかる目的のために努力したいものです。此会の創立の趣意は之れです。此の意味に賛成して多くの同好者が御入会下さる様に希望します。

大正九年九月一日 理学士 山本一清、古川龍城、外 数名」

このことは早くから天文同好会創立の構想があつて、既に準備されていた趣意書を新城新蔵博士が追認したことを意味する。また、趣意書には、古川龍城氏以外に「他 数名」と記されているが、山本博士が1957年ごろに書かれた「ゆかりの友・三編」の“古川龍城さん”の項で、「古川君、滑川君、百済君、佐々木君、中村君、上田君、等々の諸君と共に天文同好会を組織し…」と記述されている（斐太彦天文處発行「星と人」No.16、1983年に掲載）。「他 数名」と省略形ではあるが、その後に功成り名を遂げた人たちが名を連ねていたことに注目したい。

また、会誌の名称を「天界」とした経緯について、同じ遺稿の中で山本博士は次のように記しておられる。「その時の雑誌の表題を何にきめたらよいか、みんなで名案をもちよつたが、古川君の言い出した「天界」というのが簡単明瞭で宜しかろうというので、それに決定した。あとで知れたことだが、天界というのは仏教の方で用いる語であるそうな、仏教語だって、何だって、かまわない、良い言葉である。古川君が岐阜県の或る仏教寺院の出身者であるために、こんな良い名を持ち出されたのは当然である」。さらに、山本博士は、次のように付け加えている。「百済君がその後、調べた所ではドイツに、Die Himmelszelt という天文学雑誌が Vereinigung Von Freunden derAstronomie という会から発行されていることが判つて、非常に愉快であつた。会の名も、雑誌の名も日独相互に直訳したようなものである」と。

続いて、「同好会成立の由来」から一部を引用（現代かなづかいに直す）する。

「世には天文学に熱心な人がかくれているらしい、そして適当な書物や器械や同趣味の友達が無いので、始終不満足勝ちでいられるだろう、お互いのためだ、何かを考えて、好都合な形を作つて見せたいものだ」と、語り合ったこともあつた。最近に又、英米あたりの星好きな連中が一本職の天文学者も片手間の素人も一所で一何々会を作つて、相互の趣味向上のためにも、学会へ貢献のためにも、ずいぶん立派な成績を挙げているのを、新着の雑誌などで見て、

羨ましく思ったこともあった。こんな事情が重なって、吾々も一つの会を起し、前述べたような事柄を一步進めて実現して見たいと思いついたのが、同好会の抑々の始まりである」。

そして、同年9月25日に同好会は発会式を開き、新城博士が「天文学の使命」、百済理学士が「太陽系の拡張」と題して講演した。天文同好会の事務所は当時の京都帝国大学天文台内に置かれ、第1期幹部として幹事に山本一清氏と古川龍城氏、会計に滑川忠夫氏が選出された。

村山定男氏（元・国立科学博物館：隕石の研究、火星の眼視観測に貢献）曰く；

「山本先生は日本のフラマリオンというべき方だと私は思っている。独特の文章と弁舌で人々を魅了し、星の趣味に引き入れられた。天文同好会（後の東亜天文学会）を創立されたのもフランスや大英天文協会を見習われたのだと思う」（「天文の先生方」：「星の手帖」1979年秋号）。

*フラマリオン（1842～1925）：フランスの天文学者、パリ天文台に勤める一方、講演・雑誌編集など天文学の普及に努め、1887年にフランス天文学会を設立して多くの天文愛好家を各界に亘って養成した。1879年に天文学を視覚的に解説した「一般天文学」（“L'astronomie populaire”）を出版し、フランス国内に多くのファンを得、英語に翻訳され、この本により、フラマリオンの名は世界に有名になった（「天文・宇宙の辞典」、恒星社、1978から引用）。

前述の「同好会成立の由来」の中で「最近に又、英米あたりの星好きな連中が…」というくだりがあるが、村山定男氏の「山本先生は日本のフラマリオン」という表現は誠に的を得ていると思われる。筆者は当初、山本博士が天文学の普及啓発を図るために、進んで広く世間に同好の士を育成しようとしたように思い込んでいたが、どうも在野の同好の人たちと連携を保ちたいと願って「天文同好会」を立ち上げられたと理解を改めている。



大正8年の山本日記扉ページに記された会員分布図

「天文同好会」の前史

- ・既に、その前年、1919（大正8）年の日記の見開きに全国の地図があり、その上に「同好会員（十月末）」として、主要都市やその周辺に人数の多少に応じて赤色でマークが施されている。これによると、「同好会員」は札幌から鹿児島まで分布していて、東京、名古屋、京都、大阪、神戸、明石、岡山、広島には特に多い。このことから、かなり以前から天文ファンが全国各地にいて、それらの人たちと何らかの形で連携を保っておられ、その過程で会としての組織化の構想を練っておられたと考えられる。世にいう「大正デモクラシー」の中で趣味を謳歌できる時代背景が少なからず影響していたと思われる。

博士が書き残した日記を基に時を遡っていくと、天文学の普及啓発に対する博士の熱意と情熱がそこそこに伺える。

- ・同じ1919（大正8）年6月に山本先生は神戸を訪ね、賀川豊彦氏の記念講演のあと、「宇宙進化論」について講演され、その後に神戸在住の外国人（欧米人）の自宅に招かれて3吋望遠鏡を修繕。10月に「大坂毎日年鑑」のために星座案内を脱稿。12月には大津市の膳所中学校（旧制、博士の母校）を訪ね、たまたま借りてきてあった望遠鏡を検分。
- ・1917（大正6）年1月、大坂朝日新聞社で新城教授が「天文学の発達」を講演され、その後、「屋根の上にて海上用望遠鏡で木星観望を一般公衆になさしむ」。3月には「日没から天文台では一般に天体観望を許したので、多くの人々が来集した。自分は助手の人と共に四吋と七吋とを以て月や木星、土星、星雲などを見せた。十一時終了。来集せる者約三百」とある。10月に、「大坂毎日新聞婦人見学団のために新城、上田両氏と共に天文器械の案内をした。」11月には、「上賀茂行き。四吋赤道義と子午環を山麓に下し、車で教室へ。夜は一般の人々に天体観望を許す。来会約二百」（翌日は約五百）。

このように、天文学の一般社会への普及啓発は山本一清博士だけでなく、新城新蔵教授や上田穰氏、古川龍城氏をはじめとする京都帝国大学物理学科の関係者の学問に対する姿勢から発せられていると考えられる。その底流に「自由な気風」をモットーとする京都学派の伝統がここにも育まれていたようにも思われる。

結び

これまで見てきたように、山本一清博士は一般社会への天文学の普及啓発を早くから心がけ、これに情熱を注いでこられた。もう少し時間をかけて、「天文同好会」の発足に至るまでの「流れ」（前史に相当）を手繰り、そのあと「東亜天文協会」「東亜天文学会」に続く小史を調査したい。